

日本語の談話における数表示「タチ」のシフト

牧野成一

詳細目次

0. 司会者による講師紹介
1. 講演の概要
2. 日本語における数への意識
3. 認知言語学からみた人間の環境認知
 - 3.1. construal
 - 3.2. ウチとソト
4. 「タチ」の用法にあらわれた日本語の特性
 - 4.1. 日本語における複数表示表現
 - 4.2. 「タチ」は共感マーカ
 - 4.3. 共感度の階層
 - 4.4. 共感度と比喻
5. 「タチ」の使用例
 - 5.1. 「のだ」との共起
 - 5.2. 共感と個別化
 - 5.3. シフト
 - 5.4. personification (擬人化)
 - 5.5. 視点
6. 「タチ」の用例分析が示唆すること
7. 質疑応答
 - 7.1. 「タチ」の多義性
 - 7.2. individuation と personification
 - 7.3. 韓国語・中国語との対比
 - 7.3.1. 韓国語の場合
 - 7.3.2. 中国語の場合

参考文献

稿末資料

文化・言語・教育に関連する牧野成一氏の主要な著作 (抄)

日本語の談話における数表示「タチ」のシフト

牧野成一

本稿は、2007 年 5 月 29 日にお茶の水女子大学で牧野成一氏が行なった同題の講演（国際教育センター主催）をもとに加補筆・再構成したものである。録音の文字化は佐々木嘉則の監修のもとで石井佐智子が担当し、張瑜珊が作図作業にあたった。

0. 司会者による講師紹介

本日の御講演の講師、プリンストン大学 (Princeton University) 東洋学科 (Department of East Asian Studies) 教授・牧野成一先生をご紹介します。牧野先生は早稲田大学・東京大学を御卒業後 1964 年にフルブライト奨学生として渡米なさり、イリノイ大学 (University of Illinois at Urbana-Champaign) より言語学博士号を取得なさいました。1968 年からイリノイ大学で、1991 年からプリンストン大学で日本語課程を統括し多くの日本語教師・言語教育研究者を育てる傍ら、ミドルベリー大学 (Middlebury College) の夏期日本語学校 (Summer Language School) やコロンビア大学 (Columbia University) の夏期日本語教育修士課程 (Summer MA Program in Japanese Pedagogy) の指導運営にもあたってこられました。『日本語基本文法辞典』(Makino & Tsutsui 1986, 1995, 2008) や日本語教科書『なにか』(Makino, Hatasa & Hatasa 1998, 2006) の開発をなさるなど、教材開発にも携わっておられます。

牧野先生は北米圏における日本語教育界の大御所として令名が高く、OPI (Oral Proficiency Interview) という口頭能力試験の日本語版の開発・普及にもリーダー的な存在として携わっていらっしゃいます (牧野、中島、山内、荻原 2001)。さらに、2003 年から 2006 年までの 3 年間、全米日本語教育学会 (Association of Teachers of Japanese: ATJ) の会長を務められ、これら数々の功績に対し 2007 年には日本語教育学会より第 5 回日本語教育学会賞を受賞されています。

ご専門の言語学では、近年は認知言語学を中心に研究を進めておられるとうかがっております。ここ

には留学生の方、日本語教育に携わっている方、遠くからいらっしゃった方もいます。皆、今日は先生のお話をうかがえますことを楽しみにしています。どうぞ宜しくお願いします。それでは牧野先生です。

1. 講演の概要

ただ今、司会の佐々木泰子先生よりご紹介に預かりました牧野と申します。現在はプリンストン大学で、その前はイリノイ大学にいました。こちらの大学の佐々木嘉則先生がイリノイの博士課程に入学して来られたのもその頃のことです。実はこのお茶の水女子大学というのは、ここにいるどなたもおそらくまだ存在していなかった時代には東京女子高等師範学校 (女高師) の専攻科だったんですね (1900～1949 年)。私の母がこの女高師で学んだことがあり、そういう意味ではお茶の水女子大学と無縁ではないのですが、今までこちらの大学の門をくぐったことは 1 度もなくて、今日、初めてここに来ました。

前置きはこのぐらにして、今日の表題は『日本語の談話における数表示「タチ」のシフト』という少し難しいものですが、シフトに入る前に「タチ」という簡単な複数マーカーがどういう風に使われているかを概観します。「タチ」というのは接尾辞 (suffix) です。そういう短いものからどういう世界が見えてくるか、それを小さな窓として見た場合に、どういうものが見えてくるのかを考えていくと、結構面白いことがわかってくると思います。

2. 日本語における数への意識

まず、私たちは最初に英語を学んだとき、英語が数にやかましいことに悩まされました。私は今でも

英語を書くときに 3 人称単数の “s” をつけ忘れたりする位で、いまだに使い切れていない面があります。日本語の場合は、「数に対して音痴」というと妙な言い方ですが、ただ、言語としては数に対して鈍感な面があるかもしれません。あらゆる言語現象、文化現象はそれぞれの文化、言語によって鈍感な部分と鋭敏な部分があると思います。日本語の数というのは、英語のように神経質なほど表示しなくてもいいという鈍感さがあると思います。

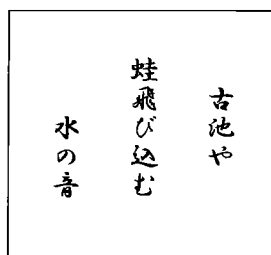


図1 「古池」の句 (芭蕉)

「古池やかわず飛び込む水の音」という有名な芭蕉の俳句があります(図1)。この蛙が何匹かというのは、日本人だったら、1匹と書いていなくても、助数詞が何にも入っていないなくても1匹だと思うわけです。

どうして1匹だと思うのでしょうか。実際にフランス語やドイツ語や英語にこの俳句が訳されているのを見ると、複数形で訳されていることが結構よくあるのですが、こういうことを説明しないで、プリンストン大学のアメリカ人学生に「蛙は何匹いると思うか」と聞いてみますと、「2、3匹いるんじゃないか」と答えます。「ぼちゃん、ぼちゃん、ぼちゃん」というほうが感覚的にいいのではないかと思います。

芭蕉が描いた俳画がどこかにあるにちがいないと探してみましたところ、岡田(1972)にこの俳句の絵がありました。その絵では蛙は1匹で、複数ではありません。つまり、芭蕉自身は蛙1匹と頭において、俳句を作ったと言えます。この俳画を見て我々日本人が蛙を1匹だと考えるようになったという人もいるかもしれませんが、大多数はそうではないと思います。もちろん、芭蕉は大変著名な俳人ですから、偽作も多かったです。ですが、この俳画が本物かどうかは芭蕉の筆癖でわかるということが前掲書に書かれています。このひらがなの「や」以上から、芭蕉が蛙をはっきり1匹だと捉えていることになり

ます。

そして、この場合、蛙を1匹だと考えるのは、文法の制約によるものではありません。むしろ、一言で言えば美学的な選択で1匹になっていると言っているでしょう。

ですが、数表示がないために色々な解釈がありえます。例えば、ラフディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn) は “Old pound frogs jump in sound of water.” と訳していますが、ドナルド・キーン (Donald Lawrence Keene) は “The ancient pound a frog leaps in the sound of water.” と、単数で訳しています。数に対する面白い曖昧さ、解釈が見られます。

3. 認知言語学からみた人間の環境認知

3.1. construal

「タチ」という数表示ですが、頻度数から言っても「タチ」がつく方が有標で、つかない方が無標、つまり普通だといえます。ここで、今日の私の話のフレームワークである認知言語学についてお話しします。私はもともとチョムスキー (Noam Chomsky) の言語学をやっていたのですが、チョムスキーの客観主義に飽き足らなくなり、言語というものを環境の中でどう捉えていくか、人間が自分の環境にあるものに対してどういう見方をするかという認知言語学の領域に足を踏みこみました。認知言語学の巨頭にイリノイ大学出身のロナルド・ランカーク (Ronald W. Langacker) という人がいます。造語だと思いますが、彼は *construal* という語を用いています。これは *construction* と似通った意味で、自分の心理的なイメージを構築するという考え方です。

人間と宇宙をどのように捉えるかも1つの *construal* という考え方です。そして、認知言語学者はよく範疇化をします。つまり、どういう部類に属するか、*categorization* を好んでします。私の話の中でも *categorization* が入ってくると思います。

3.2. ウチとソト

ここで、私が長い間考えてきた問題であるウチとソトについてお話しします。ウチからソトへというのは、空間的な表現です。日本語の場合、ウチというと「ウチ (home) へ遊びに来てください」という時にもウチという語を用います。ですが、こういった言語は私の知る限りありません。お隣の韓国語も全く違う言葉を使っているようです。ウチをそのように捉えるということは、非常に面白いことです。

物理的なウチだけでなく、比喩性が出てくるからです。日本語ではウチかソトかという2分法で捉えられるものではなく、ウチが段々ソトになっていき、物理的には out of space、完全に宇宙の外に行ってしまう。

ウチとソトを比喩的に捉えると、もともと物理的な意味である縄張りでも、縄張りの中、外に比喩的な意味が出てきます。それから、都市と農村とどちらを中心とするかはステレオタイプですが、農村が周辺化されます。中心部と周辺部という対立もウチとソトとして捉えられます。あるいは自分と他人です。「ウチ」は関西弁で自分を表すぐらいですから、ウチの空間にいる人間のうち、中核にいるのが自分で、ソトにいるのが他人です。他人といっても色々なレベルがあるわけで、2分法ではわりきれません。連続体になっていると思います。それから、心と体、哲学では身体性といいますが、やはり中核が心であって、ソトは肉体だと考えられます。我々の心、魂は体の中にあり、体はソトだと捉えられています。また、ウチは可視的な世界、つまりこの世の世界であるのに対し、非可視的な世界はあの世だと考えられます。さらに、触ることができる、可触的なものはウチ、触ることができない、非可触的なものはソトだとも考えられます。

こういう区別は色々な言語現象で触れられています。詳しいことはここで挙げませんが、文法でもこのウチとソトで、かなり説明ができるのではないかと思います。時制ではウチが現在、1番ソトが未来、過去は自分が体験したことですから、未来よりは近く、3分法で捉えられるかもしれません。

それから、人間、非人間のウチとソトの問題です。我々は何より自分が大切ですから、人間中心にものを見ると考えられます。もちろん、それを否定する見方もありますが、人間中心にものを捉え、そして非人間、無生物へとソトに広がっていきます。

4. 「タチ」の用法にあらわれた日本語の特性

4.1. 日本語における複数表示表現

この項目はこれからお話することと関わってくる問題です。サミュエル・マーティン (Samuel Martin) という、韓国語にも非常に詳しい日本語学者が、日本語の複数をマークするものには色々あると言っています (Martin 1975)。例えば「人々」、「山々」、「島々」、「家々」、「神々」という名詞の繰

り返しです。これは「いすいす」、「つくえつくえ」等と言えないように、それ程自由には使えません。それから、接尾辞にも「タチ」だけではなく、「ら」「ども」等があります。そして、体言修飾詞の「色々な」、「様々な」、「たくさん」と言えば、複数が暗示されます。さらに漢語系のものでは、接頭辞として「多文化」の「多」、「諸文化」の「諸」というものがあります。動詞や形容詞の述部で主語が複数の意味でなければ使えないものがあります。これは「集まる」、「散る」、「片付く」、「数多い」、「おびたしい」等です。

それから、数表示表現です。これは formal linguist が今でもずっと続けている助数詞の分析です。「学生が20人いる」、「ネズミが5匹いる」、「本が3冊ある」といった表現のように名詞自体に複数マーカーがつかなくても構わないわけです。英語の場合は three books のように複数表現を繰り返しますが、日本語は繰り返さなくてもいいのです。

4.2. 「タチ」は共感マーカー

私は「タチ」を共感マーカーと考えているのですが、この共感という概念は皆さんもご存知の久野暉先生が触れておられます。1977年に共著で書かれた paper (Kuno & Kaburaki, 1977) で初めて empathy という言葉が使われました。empathy ですが、たとえば John hit his brother とあれば、John の視点から言っています。

一方、John's brother was hit by him. とあれば brother の視点から言っているものです。構文によって話し手がどの視点から言っているのか、視点の問題を捉えています。もともとは文学の視点の問題を syntax の解析に導入したのですが、非常に目の覚めるような paper だったと思います。ですが、私の解釈では共感とは人間と対象、その対象になるのが人間でなくてもいいのですが、その対象との物理的な距離と心理的な距離が非常に大切な役割を果たしていると思います。

結論から言いますと、人間に近いものには「タチ」が付きやすいと考えています。formal linguistics を研究しておられる根本さんという方が面白いことを言っています (Nemoto 2000)。彼女はコンテクストをはっきりと提示していませんが、「僕は1年前に日本へ来て以来、3人の日本人と親しくしている。昨日はその日本人たちが引越しの手伝いに来てくれた。」といった例文を挙げ、「タチ」がつくのは既に前に出

てきたものをもう1度指す場合ではないかとしています。どうして既に知られている事項を指す場合に「タチ」がつくかということですが、私は共感(empathy)として捉えようとしています。「色々な」というと、「色々な人たちが学会に出席した」、「色々な人が学会に出席した」のように「タチ」がつかなくてもいいでしょう。あるいは「女の人が映画館の前にたむろしている」の場合、「たむろしている」が

複数を表すわけですから、「タチ」はあってもなくてもいいです。「おびたしい数の」といえば、必ずしも「おびたしいホームレスの人たち」とする必要はありません。

4.3. 共感度の階層

それでは「タチ」を使う場合と使わない場合、つまり有標と無標の違いは何か、これから共感という観点から見ていきます。同心円的に図を描きますと、

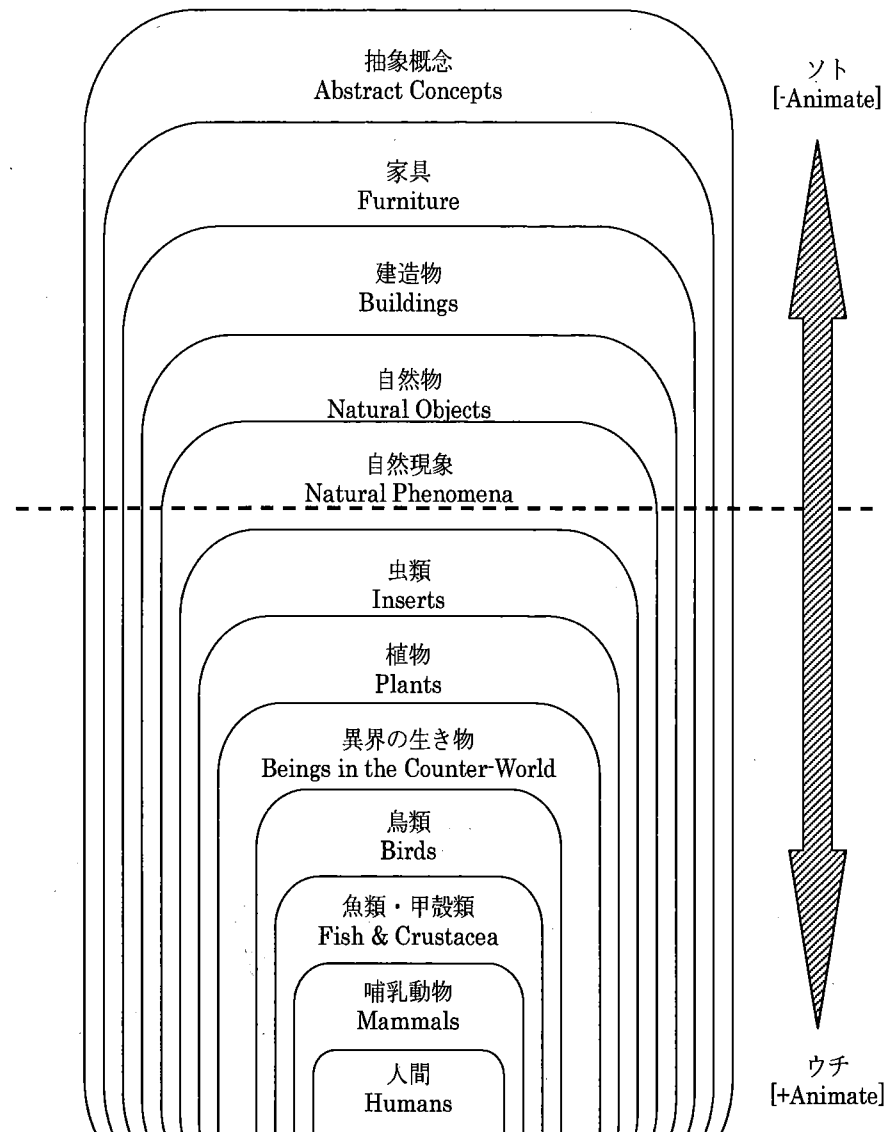


図2 風土に存在するものに対する日本人の共感ヒエラルキー
(Hierarchy of Empathy towards Animate・Inanimate Beings in Japan)

一番下が人間です(図2)。一番下を風土に存在する物に対する日本人の共感のヒエラルキー(hierarchy: 階層性)と呼んでいます。人間を中心に見た場合、「タチ」がどういうものに対して頻度が高く使われているのかという問題がありますが、この頻度数を指すのは現時点では難しいです。ですが、ないよりはあった方がいいと思ひまして、Googleを使って調べてみました。Googleで例えば「犬たち」がどれくらいの頻度で出てくるのか見てみました。「タチ」はひらがな表記、カタカナ表記、漢字表記の場合がありますが、表記の使い分けはひとまず無視しました。

Googleの場合、同じ表現が重複して検索にヒットするという問題もありますが、全体の相対的な位置づけを見ていく分には使えると思います。そういう仮説のもとで見えていくと、人間の次はやはり人間に極めて近い生物、つまり哺乳類に「タチ」がつきやすいです。私たちがペットとして飼っているような動物に対しては、やはり愛着があるわけで、それは1つの共感の表れです。その次が魚類、甲殻類です。日本は海に囲まれた島国ですし川や池もたくさんありますから、その風土の中で魚類・甲殻類に対して「タチ」をつけることが結構多いです。そして、魚類・甲殻類の次が鳥類です。また、面白いのがアニメなんかに出てくる妖怪などの異界の生物です。こういった部類のものに「タチ」がつくことが多く、例も随分出てきました。

こういうヒエラルキーは文化によって違うと思います。この図は文化的なヒエラルキーを表しているとも言えると思います。ヒエラルキーは恐らくどの文化にもあるけれど、その順序とか、あるカテゴリーが出てこないということもありえると思います。日本の場合は大体、植物・虫類・自然現象とあって、これより下がいわゆる生き物、妖怪は別として、無生物という感じで出てくるのではないのでしょうか。自然現象・自然物・建造物・抽象概念までいきます。抽象概念だと(本当に抽象概念だと言えるかどうか、わかりませんが)「沈黙たち」、「孤独たち」というものも出てきます。頻度は少ないですが、「タチ」がつく例はあります。Googleで検索した日本語の用例は日本人が書いているとは限りませんが、前後から判断して、Native writerが書いているのではないかと例を見ました。ウチからソトへというものは段階的に距離が出てきます。共感のヒエラルキー

と見ても良いのではないかと思います。人間が哺乳動物とかカテゴリーを出しましたが、虫類の中でカテゴリーランキングがあります。特に虫類は面白いです。頻度数を見ていくと、まず相対的に蝶々が高いです。それから、蛍です。簡単に言ってしまうと、日本人は蝶々が好きだと思いますが、蛍も調べると、『万葉集』にも出てきますし、『源氏物語』にも「蛍の巻」(第25帖)があります。谷崎潤一郎の『細雪』にも非常に華麗な蛍の場面が出てきます。

そして、日本語教材でもよく使われる村上春樹は『ノルウェイの森』のプロトタイプとして『蛍』という短編を書いています。それから、アニメにもなっている野坂昭如の『火垂るの墓』があります。蛍に対しては蛍狩りをするとか、蛍に対して日本人は大変な愛情、愛着を持っていることがわかります。

4.4. 共感度と比喩

今、私は比喩について研究しています。日本語には虫を含んだ比喩が多いです。例えば、「腹の虫がおさまらない」、「虫の知らせ」といったものがあります。日本人というのはお腹の中に虫がいて、それが結構大事な役割をしていると考えているようです。他にも「虫がいい」、「虫が好かない」、「虫の居所が悪い」とか色々あります。余談になりますが、私の世代では戦後、文字通りお腹の中に回虫という虫がいました。菓を飲んだりして、それをお腹の中から出した時代もあったんです。でも、最近ではそういう虫をわざわざお腹の中に入れて痩せようとするということもあると聞きました。その虫というものを比喩的に使うのはどういうことでしょうか。比喩とは、認知言語学では主要な領域です。その対象に対してある程度の共感度が高くないと、比喩の中に入っていくのは難しいです。これは文化の中で共有されている共感度と個人的な共感度とがあります。虫たちという例が実際に出てきますが、それは恐らく文化で共有されているというより、それを書いた人の個人的な共感度を表していると思います。一般的な共感度が高ければ、比喩の対象になりやすいという一般化ができると思います。蟬(セミ)、続いて蜂も日本人が好きな昆虫の1つです。

また、ゴキブリまでくると頻度は非常に減ります。ではゴキブリに対して共感度が高いのはどういうことかということ、共感度というのは必ずしも positive に働くのではなく、negative な共感度というものもあるのかなと思います。

件数が1000を下回ると、ほとんど無視しても構わないと思いますが、上から下へとずっと細かく見ていくと、ヒエラルキーになっていて1番最後のブヨは5件しか出てきません。

5. 「タチ」の使用例

5.1. 「のだ」との共起

それではインターネット上では実際にどんな使い方がされているのか、Googleで検索した結果をご紹介します。

「(5) a. 私が育てているバラたち。どれも愛着のあるバラばかり。」

(<http://www.geocities.jp/baranohanazono44/3.html>)¹

例文はすべて書き言葉です。残念ながら話し言葉のコーパスはありません。

聞くとところによると、若い人は「本たち」のように「タチ」をほとんど無機質なマーカーとして使い出しているそうです。吉本ばななあたりの小説ではこういう類の「タチ」が使われているという報告も聞いたことがあります。

「(5) b. 飼い主を待つ犬たち。吠える犬たち。諦めきったようにうずくまる犬たち。きっと殆どが死を察しているのでしょう。」

(<http://mbis0.tripod.com/abandon/abandon3.htm>) や

「(5) c. やさしく話しかけ時には厳しく教えこみ、愛情をこめて育てた馬たちの活躍を見ることは、ここで働く人々にとってこの上ない喜びなのです。」

(<http://www.jra.go.jp/hidaka/05.html>)

といった例もあります。日本語教育では「のです」というのが非常に教えにくいとされていますが、私の分析では「のだ構文」の要点を言うと、相手の言ったこと、行動に引き込まれていることを表すマーカー、あるいは自分の言いたいことに相手を巻き込むという *involvement* がキーになると思います。どちらからという、パトス (情意的) な表現だと思います。そして、こういうものが使われる場合、「タチ」が出やすいことがあります。

「(5) d. このマラソンを静かに見つめているゆかりの桜達は走る人達をどんなことを思っ

て声援していたのでしょうか。」

(<http://homepage1.nifty.com/fuufuyuyuu/sub11/000430.htm>)
では、「桜達」のように、擬人化というメタファーの出てくるところに「タチ」が出てきます。

5.2. 共感と個別化

それから、

「(5) e. 多摩川で釣れた小魚のデジタル画像が中心です。小さな魚達も横から眺めるとそれぞれ特徴があって楽しめます。」

(http://tools.the-search.jp/site_power/?url=homepage3.nifty.com/tamafish/)

という例があります。individual、個別化という考えがありますが、個別化と共感、どちらが先かという問題について私は共感があって、個別化が起こるのではないかと考えています。普通、認知言語学者は *empathy* ということを言わないで、*individuation* (個別化) と言っています。小魚というのは複数いる場合があって、なかなか注意が行かない、個別化できないことがあると思います。ここで英語に話は移りますが、いわゆる集合名詞、*fish* などは複数形がとれないと習いましたが、Googleで調べてみますと、*deers*、*fishes* が結構できます。これは *non-native writer* の誤りではなくて、やはり何か共感があって個別化があると共に集合名詞で複数になります。この辺が日本語の「タチ」の使い方と集合名詞に対する英語が *parallel* だと考えられます。別に英語だけの問題ではなく、無標の “s” というのは全く文法的です。

ですから、面白いのは集合名詞に “s” がつく場合です。これは日本語と *parallel* であって、この辺が一般的な使い方、共感、個別化という心理的なプロセスに普遍性があることを示唆していると思います。

「(5) f. あぜ道を歩きながら、田んぼをのぞくと、たくさん

の虫たちに会える。」

(http://nature.cocolog-nifty.com/wagtail/2006/08/post_880d.html)
では、「のぞくと」から個別的な注意が向いているわけ

5.3. シフト

ここからシフトの問題に入ります。シフトで1番研究がなされているのは日本語の場合、時制のシフトです。日本語だけではなく、例えば物語で過去のことを語っている場合に過去形ではなく、現在形が出てきます。「～た。～た。～た。～る。～る。」という具合です。

村上春樹は翻訳者と交信しているときに「どうし

てあなたの文章は時々、「～る。」になるのですか。」と尋ねられたそうです。村上さんは言語学者ではありません。でも一般的には色々な説明があり、その中に backgrounding か foregrounding という categorization があります。つまり、背景なのか前景なのかということです。背景的になると現在形になりやすく、前景的になると過去形になりやすいです。

私は昔シンデレラの話日本人とアメリカ人の被験者に書かせたことがあります(牧野 1978)。アメリカ人は大体全部シンデレラの話過去形で書きます。ところが日本人はそういう人が1人もいませんでした。でも面白いことにすべての日本人が同じように「～た。」を「～る。」にするかというところではありません。シフトの仕方が人によって違います。それは何を出来事、event として見るかという認識が違うからです。そうした個人差はあります。でも出来事性が高ければ高いほど「～た。」になります。事件が主要でないと見ると「～る。」になる傾向が強いです。「シンデレラは宮殿へダンスパーティーに行きました。」になると大きな event です。ここではほとんど 100% の人が「～た。」でした。ですが、もっと末梢的、背景的なものになると、現在形になります。これが時制のシフトです。

また、多くの人が研究している有名なシフトが formality のシフトです。ほとんどが「デス、マス」体で書いてあるのに突然辞書形になります。これは皆さん、ご存知だと思いますが、これがどうして現れるのかという問題です。今、私はデス、マス体で話していますが、窓を開けたら蜂が入ってきて、私の頭を刺した場合、決して「痛いです」とは言いません。「痛いです」ではおかしいですね。communication で相手を意識する限り、デス、マス体になります。もし非常事態や自分が長いこと思っている信念とか、心の中に1つの絵、静止画像みたいに持っているものに対してはデス、マス形ではなく、常体形になるというシフトがあります。

今まで「タチ」についてお話してきましたが、次に談話の中でどんなシフトが起こるか見ていきます。談話に出てくる表現の1つ1つで変わってきます。

「は」と「が」の問題もシフトですね。1度「が」が出てきて、その次「は」が出てきて、その後ずっと「は」が続くかというところではありません。例えば「太郎という学生がいました。その学生は数学がとてよくできました。ところが、ある日その学

生が数学で0点をとった。」では「ところが」というような逆接の接続詞が出てくると反転して「は」が「が」になり、新しい側面が出てきます。新しい情報のマーカーとしてシフトを起こすということもあります。

それでは、タチはどうでしょうか。

「(7) a. <1> 夏なのだ。<2> だから蝉は騒々しく鳴くのだ。<3> 深く青い空や真つ暗な影は時を止めているのに蝉は余命少ない自分の運命を思っ泣き叫ぶのだ。<4> 死に急ぐ蝉達よ。<5> お前達が泣き止めば夏が終わる。」

(<http://www.dsg4.com/04/text/9907.html> 文番号は引用者(牧野)による。以下同。)

ここでは、「のだ」だけでなく、formal linguistics で問題になった「自分」が出ています。久野暉先生は「自分」は empathy マーカーだと言っています。「自分」と呼ぶと普通人間ですが、蝉を「自分」と呼んだのは擬人化もあるし、距離感が縮まった証拠です。でも、この時点ではまだ「蝉達は」とは出てきません。用意周到に準備していくわけです。段々書き手が蝉に近づいていきます。そして4番目に「死に急ぐ蝉達よ」が出てきます。

ここで蝉達に声をかけていきます。「お前達が泣き止めば夏が終わる。」という言い方をしています。談話の運び方ですが、<1>無標→<2>無標→<3>無標→<4>有標と進展しています。それぞれがそれを支持するような捉え方をしていると見られます。

5.4. personification (擬人化)

「(7) b. <1> 私はその人が本当に大事にしている石こそ宝石と呼ぶのがふさわしいと思っています。……<2> すべての石は世界でたった1つのオリジナルです。<3> 私達が1人1人違うように石も一つ一つ違います。<4> 是非出合いを楽しんでください。……<5> 石は先ほどもいった様に原素化合物²の結晶体です。<6> 原素のまわりには電子があって、その種類によって決まった数の電子がその回りをまわっています。<7> ということは、なんらかのエネルギーがそこに存在していると思います。……<8> しかし、それだけではこの石達の魅力は測れないと思います。<9> 大事なそれはそれを感じる私達の心の方にあるのだと思います。」

(<http://page.freett.com/earthan/topic/jewels/door.html>)

私たちは「石達」といきなり聞けば、「ええっ!？」と思うわけですが、これを読むと「石達」と言う人

がいてもおかしくないな」と思いだします。まず「私はその人が本当に大事にしている石こそ宝石と呼ぶのがふさわしいと思います。」とあります。石というのは先程お見せした、ヒエラルキーからすると、9番目であり、人間とは近くありません。ですが、大事にしているという伏線がでできます。そして、<2>に「すべての石はたった1つのオリジナル」とあり、これは individualization (個別化) を表しています。石というのは無数にあるけれども、1つ1つはユニークだと言っています。<3>に「私達が1人1人違うように石も一つ一つ違います」とあり、ここでは人間と石という比較が始まっています。比喻も人間と何かの距離を縮める働きがありますが、これも personification (擬人化) であると同時に個別化であると思います。つまり情意ではなく論理、ロジックです。<6>に「元素のまわりには電子があって、その種類によって決まった数の原子がそのまわりをまわっています」とあり、ここに1つも石は出てきませんが、これは導入です。科学的なものの言い方にしています。「ということは何らかのエネルギーはそこに存在していると思います。」そして、これを踏まえて「しかし」と逆接の接続詞がくると、シフトが非常に起こりやすいとかなり前から言われています。時制のシフトに関してもそうです。<8>に「それだけでは石達の魅力は語れないと思います」とあります。つまり、科学的なもので石をすべて十把一からげに原子の構造だけを言っても始まらないということです。<8> <9>に「石達の魅力は測れないと思います。大事なそれはそれを感じる私達の心の方にあるのだと思います。」とあり、これは認知言語学の1つの核心である construal を表しています。この書き手は「それを感じる私達の心の方にある」とし、見る人、観察者がどういう視点で石を見ているかによって「石達」となるかを言いたいわけです。

5.5. 視点

また、こういう用例も Google 検索で見つかりました。

「(8) a. <1> 私達は人間にとってきれいな環境は蛍達にとっては棲みやすいものではないということに気がつくべきだと思います。<2> 蛍を復活させるということは「ありのままの自然を復活する」ことであり、人間の目で見てきれいな環境とは違います。」

(URL 不明：現在アクセス不能)

(8) a. ですが、最初の文に「蛍達」と出て来ます。

先程も言いましたように蛍は日本の文化史の中でも非常に重要な役割をしています。人間の魂の比喻として実に豊富に使われています。かりそめの美しさというか、日本人の美意識と非常にぴったりとくるものがあるのだと思います。

ですから、そういうものに甘えてしまうと、いきなり「蛍達」と言ってもそんなに驚きません。いきなりシフトして有標が出てくる文もあるわけです。<1>に「私達は人間にとってきれいな環境が蛍達にとっては棲みやすいものではないということに気がつくべきだと思います。」とありますが、ただし、この文をよく読んでみると、蛍の視点をとりなさいと言っています。ということは、書き手はのっけから蛍に近い感覚を持っているということです。ところが<2>に「蛍を復活させるということは「ありのままの自然を復活すること」であり、「ありのままのきれいな環境とは違います」。環境問題について我々の捉え方は色々であると思いますが、あくまでも人間中心で環境を良くしようとすることは、蛍のために環境を良くすることとは違うと思っています。この場合はどちらかというと蛍に対して共感のない人の立場を言っているため、無標になっていると思います。

「(8) b. <1> 会社近くの川に大きな鯉達を見つけて何年になるでしょうか。<2> こんな街中の川にも魚が戻ってきました。<3> その姿を見ることが、出勤するときのひそかな楽しみです。<4> そんな魚達も大雨が降ると川が増水し、耐えきれず流されてしまいます。<5> しかし、数日後に、再び元気な姿を見せてくれます。<6> そんな日は、一日の始まりがとっても幸せな気分になります。<7> ところが、そんな鯉をねらって釣り人がたまに訪れます。<8> つりあげられ、アスファルトの上で苦しむ鯉たち。」

(<http://park11.wakwak.com/~ham/room7/room7.html>)

これもものっけから「鯉達」と言っています。いきなり、有標を使うのは、書き手の修辭的なストラテジーを示唆しているのかもしれませんが。ちょうど英語なんかだと、代名詞が小説の文頭に出てくる場合があります。“When he got up early in the morning..., John started to make coffee and...” 最初の“When he got up in the morning”までは he が何を指すのかわかりませんが、その後 John であることがわかります。小説の書き手はあたかも John がずっと存在していたかのように書きます。いきなり話の中に 読者を投

げ込む、どっぷり浸からせるといった効果があるのかもしれませんが。<1>の「大きな鯉達を見つけて何年になるでしょうか。」の「何年になるでしょうか」というのは修辭的な疑問文です。もう何年にもなっているといいたいのです。そこから「大きな鯉達」では、イ形容詞ではなく、ナ形容詞が使われています。イ形容詞、ナ形容詞が2つにまたがっているものには「小さい、小さな」「やわらかい、やわらかな」などがありますが、どう違うかと言うと、ナ形容詞の方がずっと情意的だと思います。1つ1つの細かい言葉の選択を見ていくと、「鯉達」というマーカー、有標をつけた理由がわかるのではないのでしょうか。(8) b. の<2>に「こんな街中の川にも魚が戻ってきました。」とありますが、この場合の魚は特定の自分が好きで鯉ではありません。魚という上位概念で言っていますから、個別化が乏しくなって、魚たちとは言いません。<3><4>「その姿を見ることが出勤するときの密かな楽しみです。そんな魚達も大雨が降ると川が増水し、耐えきれず流されてしまいます」とありますが、「魚が耐えきれず」は擬人化です。「流されてしまいます」では同情もしています。

<5><6><7>に「しかし、数日後に、再び元気な姿を見せてくれます。そんな日は、一日の始まりがとっても幸せな気分になります。ところが、そんな鯉をねらって釣り人がたまに訪れます。」では、「ところが」と逆接の接続詞があつて、釣り人にそんなに愛着を持っていません。こういう視点を述べるときは無理になってしまいます。最後に「つりあげられ、アスファルトで苦しむ鯉達」と、同情と共感が入ってくると複数のマーカーが出てきます。

6. 「タチ」の用例分析が示唆すること

今日、お話ししましたことをまとめます。私が「タチ」という小さな接尾辞から言いたかったことは大きく言って2つあります。1つは文化というものを捉える1つの方法として日本人が日本語でどのように風土、環境のモノを範疇化して、カテゴリーを作っているかという、並列にカテゴリーを作っているのではなくて、ウチからソトへと同心円的に作られているのではないのでしょうか。もう1つは談話の中でシフトが起こることを見ていくと、そのシフトがどのように作られているか、もちろん書き手の心理、言語的な証拠がなければ入り込むことはできないのですが、シフトが起こる、あるいは起こらない

場合の言語的な証拠が文に現れているのではないのでしょうか。そして、複数のシフト「タチ」が起こるのではないかと考えています。言語を見ていく場合に必ずしも syntax、structure といった大きいものを見るだけではなく、小さいものを見ていくと色々なものが面白く見えてくるのではないのでしょうか。以上です。どうもありがとうございました。(会場拍手)

7. 質疑応答

7.1. 「タチ」の多義性

森山新：日本語の「タチ」が非常に変わっているなと思います。例えば「鯉達」と言った時に複数の鯉という意味と、他の魚が含まれた鯉達という意味がありますよね？

牧野成一：「山田さんたち」、「私たち」のような代表詞の場合ですね。

森山：はい、「私たち」というと「私」が複数いるわけではなくて、「私」で代表される複数の人間という意味です。この二つの用法のうちどちらが日本語の典型かということ、私は1人の中心的存在に共感を覚えて、そして個別化が生まれていくという感覚があります。この点について牧野先生はどのようにお考えでしょうか。

牧野：確におっしゃるように「タチ」の使い方には、その前にくる制約があります。「鯉達」というのは「鯉が複数いる」という意味にもとれば、「鯉を含むいろいろな種類の魚がいる」という意味にも解釈可能です。ですが、このコンテキストでは鯉だけを表していると思います。確かに「山田さんたち」というと、同じ山田さんが複数いるわけではありませんよね。アニメの世界では出来るかもしれませんが、そういうことがあつたら、恐ろしいです。グループの捉え方という、確かに複数の使い方もありますが、実は私は「山田さんたち」というのは一応除外していたんです。「蟬達」だったら、蟬と何かがいるのではなく、蟬だけというのを考えていましたが、そういう状況も考えられるわけですね。つまり、「蟬だけではなく、蝶々も同じように木にとまっている」といった場合です。そういう状況だったら、蟬達と言えるのですが、individuation が低くなる気がします。ですから、そういう「タチ」の使い方が存在することも否定はしませんが、どちらかというと「同

じものが複数ある」という捉え方をする「タチ」だけに私は焦点を合わせているといった方が正確だと思います。

7.2. individuation と personification

内田伸子：素晴らしいお話をうかがわせていただきました。ありがとうございました。おそらく personification (擬人化)・empathy (共感性) という要素が込められている点が、アメリカ人では思いつかない牧野理論のユニークな枠組みであると、非常に inspire (啓発) されました。私が質問したいと思いましたのは、individuation と personification というアイデアです。牧野先生は individuation を意識してお話しになりましたが、それはやはり先生が英語圏におられるからであって、実際に中心になるのは personification の方だったのではないかと思います。世界の区切り方として、日本語の中の要素にそうした擬人化を trigger (誘発) する要素があるのか、それとも逆に私たち日本人の世界の見方の中に情意とか共感性というものを持ち込むようなことがあって、それが言語に反映されているのか、そのどちらなのかということについてお考えをお聞かせ願いたいと思います。また、発達心理学の中には素朴生物学という領域があります。乳幼児の発達初期というのは自分の体についてよく知っていて、自分の体に近づけて、そこに関係付けて解釈できるところから順番に自分化、擬人化がおこるというデータがございます。

牧野：人形なんかは最初の擬人化かもしれませんね。

内田：そうですね。4歳の子どもですと、金魚のことを「1人、2人」と数えます。自分の体の動き方の原理を応用できるようなものに対しては人間の知識に基づき人間的に解釈しようとしています。提示された同心円ですが、まさにその通りのことがこちらでも出ております。まさに距離、animacy の判断がどのように自分の体を中心にどの程度の範囲まで使えるかの距離で同心円が出来上がっているのですね。このモデルは、発達のデータとも一致するので非常に興味深く思いました。もう1点は「は」と「が」のシフトについてです。これは私達の研究室でやっているのですが、留学生にとって「は」と「が」の使い分けは非常に難しいですね。ライティングのサポートに当たっているチューターも、使い分けを修正することはできても、どういうルールで使い分けられるかは説明できま

せん。留学生に言語学で言われている新旧情報説で「は」と「が」の使い分けを説明しますと、例外が多すぎるのですね。それで新聞記事を調べてみましたら、経済欄は「は」が、社会欄は「が」が使われていることが多いのです。経済欄では株価についての記事ですと関心は、株価が上昇したか下落したかに関心がいきます。しかし社会欄では、誰が事件を起こしたか、事件を起こした人物の方に関心があります。このことから私たちが立てた仮説は agent に心理的な焦点化がなされる状況では「が」を使い、述部の部分に心理的焦点化がされている状況では「は」を使うという仮説でした。この使い分けルールで、文学作品などを分析してみますと例外が殆どないのです。このルールを留学生に教えますと、留学生もあつという間に覚えてくれます。「は」と「が」についてこのルールを教授した群と新旧情報仮説を教えた群とでルールの定着を比較すると、心理的焦点仮説が教授効果が大きく、定着もよいということが確認されました。このことから「は」と「が」の使い分けは、「心理的焦点仮説」(柏崎 1987, 1988)に則って教えるとよいとの結論を得たのです。が、さらに先生のお話をうかがいながら、「共感性」(どちらに involve できるか)という要素を入れていくと一層例外のない規則として記述できるかなと思いました。これは感想でございます。興味深いモデルをご提示くださりありがとうございました。

牧野：personification と individuation の問題は、かなり性格が違います。私は確かに混乱して使っている部分があったと思うのですが、personification は比喩の1つの表現であって、その限りにおいては普遍的です。実は3年ぐらい前にバージニア州で巨樹が台風で倒れたことがありました。それがワシントンポストという新聞に報告されて、しばらくしてからニューヨークタイムスで同じことが報告されたのですが、その記事には巨樹に対して英語でも personification の形が出ていました。「まるで巨樹が神様のように、その葬式に皆、現れた」と載っていました。それはたった1本の巨樹を対象にしているから、individuation ではないですね。最初から individual なのですから。やはり individuation で説明が付きやすい場合と personification を持ち出さないといけない場合があるようです。personification ですべてが説明でき

ることはない、というのが今の私の感想です。

内田：つまり、言語の側よりも見方、人の認知の方にその区別を trigger するものがある、言語は乗り物であるという考え方ですね。

牧野：そうですね。ただ言語がないと、どういう construal をもって、書き手や話し手が言っているのかがわかりませんよね。言語表現自体には道具性があります。

白井恭弘：個別化 (individuation) と共感 (empathy) とではかなり重なっている部分があるのですが、先生は共感の方が先にくるとお考えですか。

牧野：「(7) a. <1> 夏なのだ。<2> だから蝉は騒々しく鳴くのだ。<3> 深く青い空や真っ暗な影は時を止めているのに蝉は余命少ない自分の運命を思っ泣き叫ぶのだ。<4> 死に急ぐ蝉達よ。<5> お前達が泣き止めば夏が終わる。」ですが、「自分」というと実は individuation ではなく、むしろ empathy の 1 部としての personification の方だと思います。先に individuation があるのではなくて、individuation がある場合には必ず empathy が働くのではないのでしょうか。どちらがより基本的かと言うと empathy の方だと思います。individuation というのは必ずしも情意的ではないんですね。empathy が先にあって individuation がある場合もあるし、empathy だけの場合もあるので、どちらかと言うと empathy の方が重要で、ヒエラルキーの上位にあると思います。この問題については私の考えも不足していると思いますので、これは宿題です。

7.3. 中国語・韓国語との対比

白井：日本語の「タチ」というのは animacy/humanness をマークするということと、複数性をマークするという両方の特徴がありますね。そこが繋がっているので話がわかりにくくなると思うのです。先生のさきほどのお話の中で、humanness から non-humanness に至るヒエラルキーがあり、日本語は非常にウチとソトとをはっきり区別する言語であるというお話がありました。そこで質問ですが、日本語と同様に classifier language の中国語とか韓国語で、似たような、humanness と個別性を conflate (融合) したマーカーがあるのか、もしあるなら、日本語と同様のヒエラルキーはあるのでしょうか。

7.3.1. 韓国語の場合

牧野：まだそこまで行っていないのですが、これからしようとは思っています。最近韓国人の言語学者と話したのですが、ヒエラルキーに対応性はないのですが、やはり生き物に対して 1 番近いようです。ただし、ヒエラルキーの生き物の中の細分化は、彼女の話によると日本語とは直感的に違っているようです。そのあたりが文化の違いを説明するのに使えるのではないかと思います。私は韓国語、中国語がわからないのですが、typology の上で違う言語で、複数マーカーが使えるかは別として、suffix (接尾辞) あるいは prefix (接頭辞) で違いが見られたら面白いと思います。韓国語のような言語ですと、やはり suffix として複数形があるわけですから、おそらく照らし合わせると出来ると思うのですが、森山先生、いかがでしょうか。

森山：韓国語だったら、「들」というのがあり、ヒエラルキーとしては似ていると思いますが、日本語のタチに比べるとかなりカバーする範囲が広いです。ですが、広いからといっても英語の複数の“-s”のように満遍なく使えるかというやはりヒエラルキーが反映されています。私は韓国語のネイティブではないのですが、日本語に似た側面と英語の“-s”に似た側面の両方があると思います。

白以然：韓国語の suffix というのは、性格は日本語と同じく、人につけるものだと思います。石とか、無生物につけることも許容されていますが、小説など文学的な表現に使われる気がします。ヒエラルキーは日本語と結構似ていると思います。

牧野：そうですね。全く同じではないのでしょうかね。

ヒエラルキーはあるけれども、順序は……

白：多分ちがうと思います。

7.3.2. 中国語の場合

楊虹：お話をうかがいながら、中国語のタチに日本語のタチに相当するようなものがどういう場面で使われているか考えてみました。森山先生が「韓国語の場合はもう少しカバーする範囲が広い」とおっしゃっていましたが、中国語の場合はヒエラルキーというのはあまり思い浮かびません。カバーする範囲も日本語よりもっと狭くなってくるという気がします。日本語の「タチ」を人間以外のものに対し「石達」のように使ったことがなかったもので、私の頭の中では使えないものだと思います。

牧野：私もそうでした。

楊：でも、猫が好きなので、「猫たち」だったら、言えるのかなとは思っていました。中国語には「們」というのがありますが、猫にも使いませんし、人間以外には使えない気がします。ですが、先生がなさったように yahoo でも何でも検索してみたら意外と使われているかもしれません。ちょっとやってみたいと思います。

牧野：もしやったら、是非結果を聞かせてください。

楊：はい、ご報告いたします。

司会：牧野先生、すばらしいお話をどうもありがとうございました。(会場拍手)

注

1. 講演中で引用された文例のうち編集作業時点(2008年10月1日時点)でWeb上にあったものはURLを明記したが、アクセスできなくなっていたものは「アクセ

ス不能」と表示する。

2. 「元素」という表記の方が広く使われているが、ここでは原文を尊重し「原素」のまま掲載する。

参考文献

- 柏崎秀子(1987)「発話者の心的態度からみた助詞「は」と「が」の使い分け」『教育心理学研究』, 35, 57-64.
- 柏崎秀子(1988)「助詞の使い分け課題における教示効果——心的態度と新旧情報に関して」『人間文化研究年報』12, お茶の水女子大学人間文化研究科 91-104.
- Kuno, S. & Kaburaki, E (1977) Empathy and syntax, *Linguistic Inquiry*, 8(4), 611-672.
- Makino, S., Hatasa, K. & Hatasa, Y. (1998) *Nakama 1*, Boston, MA: Houghton Mifflin Company.
- Martin, S. (1975) *A reference grammar of Japanese*, New Haven/London: Yale University Press.
- Nemoto, N. (2000) On [+animate] plural NPs in Japanese, S. Makino (Ed), *The 8th Princeton Japanese Pedagogy Workshop Proceeding*, 17-35.
- 岡田利兵衛(編)(1972)『図説芭蕉』角川書店

まきの せいいち/プリンストン大学 東洋学科
smakino@Princeton.EDU

稿末資料：文化・言語・教育に関連する牧野成一氏の主要な著作（抄）

言語学書

牧野成一 (1978) 『ことばと空間』東海大学出版会

牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法—日・英語比較対照』大修館

牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る』アルク

久野暉・牧野成一・スーザン G. ストラウス (編著) (2007) 『言語学の諸相』くろしお出版

日本語教育・評価

牧野成一・畑佐由紀子 (1989) 『読解 拡大文節の認知』荒竹出版

牧野成一・中島和子・山内博之・荻原稚佳子 (2001) 『ACTFL OPI 入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク

辞書

Makino, S. & Tsusui, M. (1986) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar* (『日本語基本文法辞典』) Tokyo: Japan Times.

Makino, S. & Tsusui, M. (1995) *A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar* (『日本語基本文法辞典【中級編】』) Tokyo: Japan Times.

Makino, S. & Tsusui, M. (2008) *A Dictionary of Advanced Japanese Grammar* (『日本語基本文法辞典【上級編】』) Tokyo: Japan Times.

牧野成一・中田清一・大曾美恵子 (編) (1999) KODANSHA's Basic English-Japanese Dictionary (『日常日本語バイリンガル辞典』) 講談社インターナショナル

日本語教科書

Makino, S., Hatasa, K. & Hatasa, Y. (1998) *Nakama 1*, Boston, MA: Houghton Mifflin Company.

Makino, S., Hatasa, K., & Hatasa, Y. (2006) *Nakama 2*, Boston, MA: Houghton Mifflin Company.

板坂元・牧野成一・山下貴久子 (編著) (1974) 『上級日本語読本』講談社

翻訳書

ロバート・ソマー (著), 牧野 成一・牧野 泰子 (訳) (1982) 『現代建築の反逆—タイト・スペース』東海大学出版会

マーク・L. ナップ (著), 牧野 成一・牧野 泰子 (訳) (1979) 『人間関係における非言語情報伝達』東海大学出版会

R. W. ラネカー (著), 牧野成一 (翻訳) (2000) 『言語と構造—言語学の基本概念』大修館書店